

# 明治40年から43年の『女子文壇』投稿作品に見る 女子の音楽活動

清水 春 菜\*

## Young women's musical activities as seen through literary works submitted to *Joshi Bundan* in 1907–1910

SHIMIZU Haruna

### Abstract

This paper clarifies the kind of music that appeared in literary works submitted to *Joshi Bundan*, a literary magazine for young women published in the late Meiji and early Taisho periods. *Joshi Bundan* published unedited literary works by young amateur female authors. Therefore, analyzing these works is expected to reveal the music that young women of the time were familiar with. This study investigates the musical genres, literary genres, and authors' residential areas published in *Joshi Bundan* from 1907 to 1910, analyzes the characteristics of music familiar to young women during the studied period, and considers the relationship between music, literary works, and residential areas. The results indicate differences in the trends of music genres depending on the genre of literary works and residential areas. In particular, while singing (*shoka*) education was widespread in all residential areas, the acceptance of Western music differed by residential area.

Keywords : music, *Joshi Bundan*, singing education, acceptance of Western music, Late Meiji period

### 1. 研究目的

『女子文壇』は1905（明治38）年1月より刊行され、投稿規定に「女子に限る」という条件を持ち、当時唯一の女子向け文学雑誌として、1913（大正2）年8月まで8年8ヶ月にわたり全132号が刊行された。『女子文壇』の読者及び投稿者の多くは「女学校出で当時のエリート階層」（渡邊 2005：3）の若年女性（以降、当時の若年女性を女子と表記）だが、地方在住者や女工や教員等の職業婦人など、幅広い読者層を獲得し、投稿作品は国内各地に留まらず在外邦人からも寄せられていた。『女子文壇』への投稿を作家への足がかりとした者も多数おり、尾島菊子（1879-1956）<sup>1</sup>、水野仙子（1888-1919）<sup>2</sup>らは女性職業作家<sup>3</sup>の草分け的存在でもあり、1911（明治44）年に女性だけの文芸雑誌を目指して発行された『青踏』にも参加している。

明治末期における文学作品や女性向けの雑誌に登場する、音楽をたしなむ女学生像や音楽そのものについては既に多くの先行研究がある。しかし、その研究対象として取り上げられているのは、プロフェッショナルな男性作家や編集者により執筆、編集された文学作品や雑誌が大半を占めている。一方で『女子文壇』は「『青踏』以

---

キーワード：音楽、女子文壇、唱歌教育、洋楽受容、明治末期

\*平成31年度生 比較社会文化学専攻

前の唯一の女性向け文学雑誌（飯田 1998：23）であり、プロフェッショナルな男性作家とは対極とも言えるアマチュア女子からの投稿作品を、編集の手を加えずそのまま掲載している。したがって、『女子文壇』の投稿作品に登場する音楽の種類や傾向を分析することで、明治末期の女子を日常的に取り巻く音楽を女子自身がどのように捉え、何を「書き残す価値があるもの」と判断していたか、検証及び考察できると考えた。また、『女子文壇』の投稿者の多くは専門的な音楽教育を受けたわけではなく、投稿作品に登場する音楽も演奏会のように人前で披露されるような性質のものは少なく、嗜みや生活の一部として描かれることが大半を占めている。そのため、『女子文壇』における音楽の言説からは、当時の演奏会や音楽学校の記録には残らない、より日常生活に近い音楽の実態を読み取れることが期待できる。

## 2. 研究対象

『女子文壇』の紙面編成は、著名人や識者らの寄稿文を掲載した「本欄」と、読者からの投稿作品を掲載した「投稿欄」、読者達の交流の場である「誌友倶楽部」の3つに大別される。投稿欄のジャンルは、随筆、小説、お伽噺、日記、書簡文、評論、短文、滑稽話、新体詩、和歌、俳句、短歌、新歌謡等の他、編集部から出されるテーマ（課題）に沿った短い文章（「文壇遊戯」、「余興」等の項目タイトルが用いられたが、以降まとめて「お題」と表記）や図画、写真に至るまで多岐にわたる。投稿作品には選者によって順位を付けられ、入賞者には賞金や景品が贈られた。

本稿では1907（明治40）年1月から1910（明治43）年12月までに発行された『女子文壇』66号分の投稿欄から、詩、和歌、俳句、図画、写真、滑稽話、少女文壇<sup>4</sup>、劇<sup>5</sup>を除いた、散文（随筆、日記、評論、ノンフィクション）、ストーリー性のある創作（小説、書簡、お伽噺）、作文の練習として投稿を推奨されていたごく短い文章（短文、お題）を研究対象とする。1911（明治44）年以降は誌面の体裁が大きく変わるため集計表等は分けて作成するのが適切であると考え、本論では1910（明治43）年に発行された号までを対象とした。また、明治40年代は文学史において題材をより身近なものに求め、緻密な観察に基づいた写実的描写を重視した自然主義文学が興隆した時代であり、『女子文壇』でも本欄と投稿欄両方で自然主義文学についての言及が度々なされている。投稿欄の選者の一人である小栗風葉（1875-1926）<sup>6</sup>は『女子文壇』の投稿作品を「皆自分のことを書いてゐる、幼稚でも、単純でも精一ぱい自分の感じた通り、見た通り、考へた通りを真直にわきめもふらず書いてゐる」（4巻15号）と評価している。従って、特にこの時期の『女子文壇』の投稿文に見られる音楽の言説は、荒唐無稽な創作ではなく投稿者自身の生活に密接した音楽経験に基づいた描写が多いと考えられる。このような条件を総合的に鑑み、本論の研究対象期間は1907（明治40）年から1910（明治43）年に限定した。さらに『女子文壇』全号の全掲載作品のデータベースを作成した金子幸代は1910（明治43）年に発行された臨時増刊号の「都会の婦人」（6巻7号）と「地方の婦人」（6巻11号）<sup>7</sup>について、当時の情報流通や教育環境の地域差に触れた上で、投稿者の文章からは「地方」の婦人が「都会」に憧れるという構図が目立つ（金子 2007：82）と指摘している。「地方の婦人」では農学博士の横井時敬（1860-1927）<sup>8</sup>が「地方の農業は、殆んど女が中心に成つて働いて居る」「あはれむべき女工等（中略）覚えるものは他の悪口と、聞くに堪へない様な俗悪な唄位」と寄稿<sup>9</sup>する等、女子の教育環境が拡充を続ける都会と一日中労働に明け暮れる地方の格差を是正すべきという記事も多いため、投稿者の居住地についても注目していく。

## 3. 研究方法

研究対象期間である明治40年1月号から明治43年12月号までの『女子文壇』に掲載された、文章による投稿作品のうち、動物が楽器を演奏するといった擬人化や比喩表現も含め、旋律やリズムを伴う音楽の演奏、あるいは具体的な楽器や楽譜の描写だと明確に判断できた作品計1100作を対象号より抽出し、リスト化を行った。この作品群を以後「音楽登場作品群」と称する。「鳥の歌」「胸の琴（線）」等の慣用表現や、客引き、時刻を知らせる、家畜を管理するなどの目的で使われる笛、鈴、鐘の音、葦笛や角笛等は除外した。抽出した作品は内容に応じて〈随筆〉（342作）、〈短文〉（214作）、〈日記〉（148作）、〈小説〉（121作）、〈お題〉（104作）、〈書簡〉（66作）、〈お伽

嘶) (35作)、〈評論〉(34作)、〈ノンフィクション〉(24作)の9つの作品ジャンルに分類した。

作品に登場する音楽に関するキーワードは歌唱、洋楽器、和楽器(以降、この3項目を「大項目」と表記)に大別した上で、〈唱歌〉、〈校歌(寮歌を含む)〉、〈子どもの歌(子守歌、遊び歌、わらべ歌等)〉、〈独唱〉、〈合唱(重唱、斉唱を含む)〉、〈讚美歌〉、〈御詠歌〉、〈民謡(鄙唄、口説き、甚句等を含む)〉、〈俗謡(都々逸、流行歌等を含む)〉、〈仕事歌(田植歌、茶摘み唄、馬子歌、舟歌等)〉、〈軍歌〉、〈謡曲〉、〈独吟〉、〈箏曲〉、〈三味線音楽(浄瑠璃、新内、清元、長唄、地唄、端唄、小唄、義太夫)<sup>10)</sup>〉、〈琵琶歌〉、〈創作歌(作曲を含む)〉、〈歌その他(曲名不明、単に「歌」と表記されているものを含む)〉(以上18項目を「歌唱」として扱う)、〈オルガン〉、〈ピアノ〉、〈手風琴(アコーディオン)〉、〈ヴァイオリン〉、〈ハーモニカ〉、〈ラッパ〉(以上6項目を「洋楽器」として扱う)、〈箏〉、〈三味線(三絃を含む)〉、〈琵琶〉、〈笛〉、〈尺八〉、〈太鼓(鼓を含む)〉(以上6項目を「和楽器」として扱う)、〈その他楽器(マンドリン、鉦、銅鑼等)〉の31の音楽ジャンル(以降、この31項目を「小項目」と表記)に分類した。「三味の音に連れて紅白だんだら染めの引幕はあけられた。義太夫は益々進んで榮御前のお入りとなり」(3巻8号)<sup>11)</sup>のように、歌と伴奏楽器の記述がある場合は1つの作品を両方の項目(この場合は〈三味線音楽〉と〈三味線〉)でカウントした。

投稿者の居住地の記載のあるものについては〈都会(旧東京市<sup>12)</sup>)〉、〈地方都市(東日本)(横浜、名古屋)〉、〈地方都市(西日本)(大阪、京都、神戸)〉(以上3項目を「都市部」として扱う)、〈その他(東日本)(都下を含む)〉、〈その他(西日本)〉(以上2項目を「都市部以外」として扱う)、〈外国(イギリスやアメリカ等の他、当時の日本領であった台湾や樺太も含む)〉の6つに分類した。さらに金子幸代が作成した『女子文壇』のデータベース(金子2011)から文章の投稿作品10822作のデータを抽出し、音楽登場作品群と同様、作品ジャンルと居住地の分類を行った。この10822作の作品群を以後、「文章投稿作品群」と称する。当然ながら、文章投稿作品群には音楽登場作品群の全ての作品が含まれる。また、音楽ジャンルの大項目は作品数でのカウントとしてあるため、小項目の合計数より少なくなっている<sup>13)</sup>。これらのデータをもとにした集計結果を表にまとめ、『女子文壇』投稿作品において音楽ジャンル、作品ジャンル、居住地の3要素がそれぞれどのような特徴や傾向を持っているのか、分析と考察を行っていく。

#### 4. 調査と分析結果

音楽ジャンルと作品ジャンル、音楽ジャンルと居住地について表1及び表2の通り集計した。当てはまるデータ個数が5以下の場合には正確な判定が困難なため、分析は参考程度に留めることとし、表内では網掛を用いた。表1の数値で見ると登場作品数が100を越える音楽ジャンルの小項目は〈箏〉(245作)、〈歌その他〉(173作)、〈唱歌〉(141作)、〈ヴァイオリン〉(105作)であり、大項目では歌唱：洋楽器：和楽器の比率は概ね3：1：2となっている。この比率は表2の居住地ごとの集計においても、海外を含む全ての地域でほぼ変わらない比率を維持しているのが興味深い。明治期の一般大衆の西洋音楽受容について研究した森みゆきは、明治40年代は「西洋楽器で西洋音楽を演奏する」(森2014：48)ことが定着し、西洋楽器が流行の中心となったと結論付けているが、同時期の『女子文壇』投稿作品に限って言えば、洋楽器より歌唱や和楽器の占める割合の方が大きいと言える。

また、明治後期から昭和初期にかけての女子ミッション・スクールの同窓会における演奏活動の研究では、讚美歌を中心とした歌唱の演奏機会が圧倒的に多い一方で、和楽器は歌唱や洋楽器と比べて演奏機会が非常に少ないという結果になっている(清水2022)。『女子文壇』への投稿作品は市井の生活に根ざしたものが多いため、同窓会という限定的な催しにおける演奏プログラムと単純な比較はできないが、『女子文壇』の投稿者層とミッション・スクールの女学生では、洋楽器と和楽器に触れる機会が大きく異なっていたと考えられる。さらに、『女子文壇』投稿者層とミッション・スクールの女学生、あるいは日常的な生活と学校の式典の場、どちらにとっても歌唱はもっとも親しまれていたと言える。

4-1. 「音楽登場作品群」に見られる特徴

4-1-1. 音楽ジャンルと作品ジャンルの関係

表1のデータに基づき、各作品ジャンルに登場する音楽の特徴を考えていく。まず特筆すべきは〈お伽噺〉の歌唱との結びつきの強さである。各音楽ジャンルの小項目が登場する作品数を、音楽登場作品数で割った結果を以後「登場頻度」と称するが、〈お伽噺〉における〈創作歌〉の登場頻度は18/35（51.4%）であり、お伽噺の半数以上に〈創作歌〉が登場している上、歌唱全体では34/35（97.1%）となり、〈創作歌〉を中心とした歌唱と極めて高い関係性が見える。〈お伽噺〉は投稿作品の募集期間が1908（明治41）年1月（4巻1号）から1909（明

表1 音楽ジャンルと作品ジャンル（投稿数） 清水作成  
網掛は作品数が5以下の項目（以降同様）

		随筆	短文	日記	小説	お題	書簡	お伽噺	評論	ノンフィクション	
文章投稿作品数		1556	4134	798	542	1411	830	118	537	299	
音楽登場作品数		342	214	148	121	104	66	35	34	24	
歌唱	唱歌	141	52	22	20	13	11	4	10	2	7
	校歌	9	4	0	3	1	0	1	0	0	0
	子どもの歌	44	17	13	3	5	4	0	1	0	1
	独唱	8	4	1	0	2	0	1	0	0	0
	合唱	5	1	2	1	0	0	0	0	0	1
	讚美歌	36	12	3	5	5	6	2	0	2	1
	御詠歌	3	1	0	1	1	0	0	0	0	0
	民謡	32	9	8	7	4	1	3	0	0	0
	俗謡	56	29	9	5	4	4	1	1	3	0
	仕事歌	55	22	13	6	4	1	7	0	2	0
	軍歌	15	6	4	1	2	1	1	0	0	0
	謡曲	24	6	5	5	3	3	2	0	0	0
	独吟	5	1	0	2	0	1	0	0	1	0
	箏曲	23	10	0	5	2	3	3	0	0	0
	三味線音楽	46	12	8	4	12	7	3	0	1	0
	琵琶歌	15	4	5	3	0	2	1	0	0	0
	創作歌	34	1	7	2	2	3	1	18	0	0
歌その他	173	60	39	19	18	13	9	9	6	0	
洋楽器	オルガン	53	12	10	9	3	13	2	0	1	3
	ピアノ	71	23	7	10	9	16	4	0	2	0
	手風琴	16	1	4	4	0	6	1	0	0	0
	ヴァイオリン	105	21	14	14	17	21	10	1	6	1
	ハーモニカ	24	5	3	5	4	5	2	0	0	0
	ラッパ	12	2	6	1	1	0	1	0	1	0
和楽器	箏	245	63	45	46	22	36	16	2	5	10
	三味線	95	29	15	12	17	14	2	1	5	0
	琵琶	28	8	5	6	2	5	2	0	0	0
	笛	60	16	20	9	4	5	4	1	1	0
	尺八	33	10	5	5	3	3	6	0	0	1
	太鼓	69	32	17	11	4	2	2	0	1	0
その他	31	9	6	4	0	5	2	2	3	0	
歌唱	664	232	127	81	75	55	33	34	17	10	
洋楽器	234	57	40	38	31	39	16	1	8	4	
和楽器	426	132	86	70	45	43	27	2	10	11	

治42)年7月(5巻9号)までと限定的であるが<sup>14</sup>、作品内で登場人物にオリジナルの〈創作歌〉や既存の〈唱歌〉、あるいは「面白い歌を歌って」(5巻2号)<sup>15</sup>のように〈その他歌〉に分類される描写が多く登場する。〈唱歌〉はどの作品ジャンルでも頻繁に登場する傾向にあるが、〈お伽噺〉は内容が幼年向けを意識したものであるにも関わらず、子守歌やわらべ歌のような〈子どもの歌〉の登場頻度は、むしろ他の作品ジャンルよりも低く、学校で教わる〈唱歌〉の方が多く登場する。我が国における子どものための童話や童謡の発展は1918(大正7)年の『赤い鳥』刊行を待つことになるため必然とも言えるが、1907(明治40)年の小学校令の改正に伴い「唱歌科」が必修科目になるなど、投稿者の女学生が充実した唱歌教育を受けられる環境が整いつつあったことも〈唱歌〉

表2 音楽ジャンルと居住地(投稿数) 清水作成

		都市部			都市部以外		海外	
		都会	地方都市 (東日本)	地方都市 (西日本)	その他 (東日本)	その他 (西日本)		
文章投稿作品数		1409	252	819	4123	3062	172	
音楽登場作品数		198	35	70	371	261	15	
歌唱	唱歌	132	29	3	5	53	40	2
	校歌	9	6	0	0	2	1	0
	子どもの歌	41	5	2	6	14	14	0
	独唱	6	3	0	0	2	0	1
	合唱	4	1	0	0	2	1	0
	讃美歌	31	7	0	2	11	11	0
	御詠歌	1	1	0	0	0	0	0
	民謡	26	5	0	0	14	7	0
	俗謡	46	14	3	1	18	9	1
	仕事歌	44	7	1	2	18	16	0
	軍歌	12	2	0	1	7	2	0
	謡曲	21	2	4	1	8	6	0
	独吟	4	1	0	0	1	2	0
	箏曲	23	7	1	4	7	4	0
	三味線音楽	33	14	2	2	13	3	0
	琵琶歌	13	7	0	1	2	3	0
	創作歌	34	4	0	4	13	13	0
	歌その他	160	28	6	17	62	41	6
洋楽器	オルガン	48	11	2	8	20	6	1
	ピアノ	59	21	0	5	17	16	0
	手風琴	15	2	0	0	13	0	0
	ヴァイオリン	91	18	4	5	33	28	3
	ハーモニカ	20	7	0	1	9	2	1
	ラッパ	12	3	0	1	5	3	0
和楽器	箏	207	46	8	18	66	66	3
	三味線	76	21	7	5	24	17	2
	琵琶	22	9	0	0	8	5	0
	笛	53	9	1	5	21	15	2
	尺八	27	6	0	2	9	9	1
	太鼓	59	13	4	1	29	10	2
その他	27	11	0	0	8	7	1	
歌唱	584	124	19	44	229	159	9	
洋楽器	205	53	6	17	81	45	3	
和楽器	360	86	16	26	127	99	6	

の頻繁な登場を後押ししたと考えられる。〈唱歌〉については4-1-4節でさらに分析を行う。

〈随筆〉は音楽ジャンルの31の小項目全てが登場している唯一の作品ジャンルであり、作品数の割合で換算しても突出した項目がないことが特徴だが、一方で〈短文〉は〈笛〉、〈日記〉は〈箏〉、〈書簡〉は〈尺八〉のように、登場頻度の高い項目を持つ作品ジャンルもある。とくに〈書簡〉の〈尺八〉登場頻度は6/66 (9.1%)であり、他の作品ジャンルでの〈尺八〉の登場割合と比べて目立って高いと言える。〈書簡〉は送り相手を設定した手紙形式の作品だが、男兄弟に宛てた作品内で〈尺八〉について言及されることが多く、他の作品ジャンルとの登場頻度の差を考慮すると、尺八が箏や三味線と比べて男性的なイメージが強かったことが原因と推察した。

〈お題〉には「習い事」や「好きな音楽」が課題だった回があり、〈オルガン〉〈ピアノ〉〈ヴァイオリン〉といった洋楽器は「矢張り平常から習ひたいと思つて居ましたピアノが好いと思ひますの」(3巻1号)<sup>16</sup>、「特にオルガン、ヴァイオリン、が好きなので、これらの楽器を演奏したり聞いたりしてゐる時は、夢中になるので、折々食事も忘れる事があります」(4巻5号)<sup>17</sup>のように、読者層にとって憧れの対象として登場する。一方で、〈箏〉〈三味線〉は「お向の清子さんは琴が御上手、あの歌會に弾かれた六段ほんとによかつた」(3巻1号)<sup>18</sup>、「近隣から毎日三味線の音を聞いて居ります」(4巻5号)<sup>19</sup>のように、より日常的で身近な楽器として登場している。〈箏〉をはじめとした和楽器は現実の生活に即した内容が濃く反映される〈日記〉〈ノンフィクション〉でも登場頻度が高い。〈三味線〉については別途4-1-5節で詳しく述べるが、〈小説〉〈評論〉への登場頻度が比較的高く、〈随筆〉〈日記〉への登場頻度は低い。

音楽ジャンル大項目について考えると、登場頻度が歌唱>和楽器>洋楽器の順でない作品ジャンルは〈ノンフィクション〉(和楽器>歌唱>洋楽器)のみである。また歌唱は〈お伽噺〉、洋楽器は〈お題〉、和楽器は〈日記〉において最も高い頻度で登場している。

#### 4-1-2. 音楽ジャンルと居住地の関係

表2のデータに基づき、投稿者の居住地ごとの特徴を考えていく。音楽ジャンルの大項目の登場頻度は前述の通りどの地域でも歌唱：洋楽器：和楽器の比率が概ね3：1：2であるが、小項目を一つずつ見ていくと地域ごとに特徴があった。〈ヴァイオリン〉と〈箏〉はどの地域からの作品にも頻繁に登場している。〈ピアノ〉は〈都会〉の作品に21/198 (10.6%)と、高い頻度で登場する一方で、〈地方都市(西日本)〉では〈オルガン〉の登場頻度が8/70 (11.4%)と高く、大阪、京都、神戸のような地方都市であっても西日本では唱歌や校歌の伴奏のための学校のオルガンが、ピアノより身近な楽器であったと推察できる。また〈仕事歌〉が都市部より都市部以外の作品で頻出するのは、地方の女は都会の女より労働に従事する機会が多いという横井時敬の指摘と一致する結果である。〈三味線音楽〉〈三味線〉は東日本からの投稿作品に多く登場しているが、これについては4-1-4節で詳しく述べる。〈手風琴〉は東日本からの投稿作品にのみ登場しており、さらにその多くは都市部以外の〈その他(東日本)〉からの投稿である。手風琴は明治中期に流行したが、「社会に普及するとともに大衆化してイメージが低下し始め」(高田 1993: 75)、明治末期から大正初期に「ポスト手風琴としてヴァイオリンが庶民に親しまれる」(高田 1993: 76)ようになるのと入れ替わる形で衰退したとされている。しかし、都市部以外の東日本では本稿の研究対象期間である明治末期においても、手風琴(〈その他(東日本)〉から投稿された登場作品数13作)が、ハーモニカ(同9作)、琵琶(同8作)、尺八(同9作)等と同等以上に親しまれていたと考えた。

#### 4-1-3. 複数の音楽ジャンルが登場する作品と居住地の関係

表3では1つの作品内に複数の音楽ジャンル小項目が登場する作品数と居住地の関係をまとめた。「複数ジャンル登場作品数計」欄の下段は、上段の作品数÷総作品数の計算結果をパーセンテージ表記にした。例として、〈都会〉の場合は73/198 (36.9%)であり、この数値が高いほど、1作品内に複数の音楽ジャンルが登場する割合が高いと言える。〈都会〉と〈海外〉の作品は、1作の中に複数の音楽ジャンルが登場する頻度が高い。〈海外〉は作品数自体が少ないため断定は難しいが、〈都会〉については他の地域に比べて、音楽ジャンルの選択肢が豊富だったことが、投稿作品にも表れたと推測した。

表3 1作品に複数の音楽ジャンルが登場する作品と居住地 清水作成

		総作品数	登場する音楽ジャンル小項目数					複数ジャンル 登場作品数計
			2	3	4	5	6以上	
都市部	都会	198	47	15	5	3	3	73 36.9%
	地方都市（東日本）	35	4	3	1	0	0	8 22.9%
	地方都市（西日本）	70	16	2	1	1	0	20 28.6%
都市部以外	その他（東日本）	371	63	8	5	7	2	85 22.9%
	その他（西日本）	261	49	8	4	5	0	66 25.3%
海外		15	3	2	0	0	1	6 40.0%

4-1-4. 曲名が特定できる唱歌について

表4は『女子文壇』投稿作品のうち曲名が分かる唱歌と、明治から大正にかけて活躍した90名の作家・評論家等の文学作品に登場する唱歌の種類と頻度について整理した若井勲夫の調査結果（若井 2005）の内3名以上の作家に言及された唱歌を比較したものである。表4で曲名が判明した唱歌19曲に対し、3作品以上に登場したのは「桃太郎」（11作）、「君が代」（8作）、「故郷の空」（4作）、「螢の光」（3作）、「露営の夢」（3作）の5曲であった。若井の調査と比較すると『女子文壇』投稿作品で最も多かった「桃太郎」が作家たちからあまり言及されず<sup>20</sup>、逆に「螢の光」「仰げば尊し」「うさぎとかめ」は『女子文壇』投稿作品ではさほど登場しないなど、登場回数の順位には差が見られる。これは若井の研究対象の作家の男女比がおよそ8：1で、執筆時の年齢にも幅があるのに対し、『女子文壇』への投稿者が女子のみであったために生じた嗜好の差も一因を担っていると考えられる。夏目漱石の著作に登場する「女学生上がり」のヒロインを、「良妻賢母」という視点から分析した余鳳平は、明治後期の女子教育が国家主導で良妻賢母の育成を目的としていたため、近代的な知識を身に付けていながら「女学生上がり」は、社会進出の夢を実現できなかった」（余2020：81）と指摘している。卒業式で歌われる「螢の光」「仰げば尊し」について、若井の調査結果と比べて、『女子文壇』での登場頻度が低いのは、当時の男女の進学率の差による卒業式の体験機会格差だけではなく、卒業後は家庭内に拘束される（余2020：74）女性と社会進出を実現させる男性とでは卒業式に対する思い入れに差があったことなども関係していた可能性がある。なお、「桃太郎」は1900（明治33）年刊行の『幼年唱歌（初の上）』収録の納所弁次郎作曲のものと、1901（明治34）年刊行の『幼稚園唱歌』の滝廉太郎作曲のものが混在している。歌詞で明確に判断できたのは、納所弁次郎版が6、滝廉太郎版が1だった。

表4 唱歌タイトル 清水作成

『女子文壇』に複数回登場した唱歌と岩井氏の調査結果で3名以上の作家から言及があった唱歌を記載した

唱歌タイトル	『女子文壇』 登場回数	岩井 2005	唱歌タイトル	『女子文壇』 登場回数	岩井 2005	唱歌タイトル	『女子文壇』 登場回数	岩井 2005
桃太郎	11	0～2	仰げば尊し	2	7	兎と亀	1	8
君が代	8	9	一月一日	2	0～2	美しき天然	1	3
故郷の空	4	4	紀元節	2	4	金剛石	1	5
螢の光	3	16	散歩唱歌	2	0～2	春のやよい	1	3
露営の夢	3	0～2	須磨の浦	2	0～2	金太郎	1	3
			蝶々	2	4	天長節	1	4
			鳩ぼっぼ	2	0～2			
			離れ小島	2	0～2			

#### 4-1-5. 三味線音楽及び三味線と居住地の関係

本稿では、浄瑠璃、新内、清元、長唄、地唄、端唄、小唄、義太夫を、人前で演奏することを目的に習得し、主に三味線とともに歌われる音楽として、〈三味線音楽〉と定義した。表5では三味線音楽が登場する作品と投稿者の居住地をまとめたが、〈都会〉と〈地方都市（東日本）〉の作品での登場回数の多さが目立つ。東日本と西日本で分けた場合は約6：1となり、4-1-2節で指摘した通り、圧倒的に東日本からの投稿作品が多く、新内、清元、長唄、小唄、義太夫については、東日本からの投稿作品にのみ登場する。明治20～30年代には三味線が芸娼妓を連想させるとして娘の習い事として忌避される傾向にあった影響があり、『女子文壇』投稿作品においても三味線は遊郭やお座敷遊びの表現の一環で登場することが多く、実生活に即した〈随筆〉や〈日記〉で〈三味線音楽〉及び〈三味線〉の登場頻度が低い理由の一つとして考えた。一方で、日露戦争期以後から大正前期にかけて三味線の芸娼妓のイメージは薄れ、家庭内の団欒のための楽器として再評価されてきた（歌川2019：95-96）との指摘もあり、本研究の研究対象期間はその過渡期として、東京、横浜、名古屋といった東日本の都市部から三味線に対するイメージの変化が起こっていたため、〈都会〉と〈地方都市（東日本）〉からの投稿作品では、他の地域と比べて〈三味線音楽〉及び〈三味線〉が頻繁に登場したと推察した。

表5 三味線音楽の投稿者居住地の内訳 清水作成

		浄瑠璃	新内	清元	長唄	地唄	端唄	小唄	義太夫
都市部	都会	0	4	1	2	1	2	1	5
	地方都市（東日本）	1	0	0	0	0	1	0	0
	地方都市（西日本）	0	0	0	0	1	1	0	0
都市部以外	その他（東日本）	1	0	1	4	1	2	0	4
	その他（西日本）	2	0	0	0	1	0	0	0

#### 4-2. 「音楽登場作品群」と「文章投稿作品群」の比較

##### 4-2-1. 「音楽登場作品群」と「文章投稿作品群」の作品ジャンルの関係

表1で示した数値を元に、各作品ジャンルの文章投稿作品総数に対する各音楽ジャンル小項目の登場作品数の割合について考えていく。例として、〈随筆〉の投稿作品総数は1556、〈唱歌〉の登場する〈随筆〉作品数は52のため、52/1556（3.3%）となる。文章投稿作品数に対する音楽登場作品数の割合が15%を超えるのは割合の高い順に〈お伽噺〉（29.7%）、〈小説〉（22.3%）、〈随筆〉（22.0%）、〈日記〉（18.5%）の4つであり、この4ジャンルの作品では音楽の描写が頻繁に行われていると言える。これらはいずれも、特定のテーマや出来事を書く〈お題〉〈評論〉〈ノンフィクション〉、特定の相手を想定して書く〈書簡〉、字数上限が少なく設定されていた〈短文〉と比べて、執筆内容を書き手が自由に選択、あるいは設定できるため、音楽について言及しやすかったと考えられる。

4-1-1節の結果と比較すると、〈日記〉における〈箏〉、〈小説〉における〈三味線音楽〉〈ヴァイオリン〉〈三味線〉、〈お伽噺〉における〈唱歌〉〈創唱歌〉〈歌その他〉の登場頻度の高さが共通している。〈随筆〉については音楽投稿作品群内で分析した際には際だった特徴が見られなかったが、文章投稿作品群と比較すると、他の作品ジャンルでは登場頻度の低い〈俗謡〉〈仕事歌〉〈太鼓〉等も含め、全ての音楽ジャンルが満遍なく登場しており、音楽と結びつきが強いジャンルだと言える。

音楽ジャンルの大項目では〈お伽話〉には歌唱が登場する頻度が際だって高く、〈小説〉には他の作品ジャンルと比べて歌唱、洋楽器、和楽器全てが高い頻度で登場する。〈小説〉と比較すると、〈随筆〉は洋楽器、〈日記〉は歌唱の登場頻度が若干少ない結果となった。

##### 4-2-2. 「音楽登場作品群」と「文章投稿作品群」の居住地と音楽ジャンルの関係

表2で示した数値を元に、各地域の文章投稿作品総数に対する各音楽ジャンル小項目の登場作品数の割合を考えていく。例として、〈都会〉の投稿作品総数は1409、〈唱歌〉の登場する〈都会〉作品数は29のため、29/1409（2.1%）となる。文章投稿作品に対する音楽登場作品の割合は〈都会〉と〈地方都市（東日本）〉が約14%、他の地域は



約9%であった。4-1-2節の分析結果同様、〈手風琴〉は〈その他（東日本）〉、〈ピアノ〉〈三味線音楽〉〈琵琶歌〉〈琵琶〉は〈都会〉、〈三味線〉は〈都会〉と〈地方都市（東日本）〉の作品で登場する頻度が高い。〈唱歌〉については〈都会〉の作品に登場する頻度が他の地域の約2倍、〈地方都市（西日本）〉との比較では3倍以上となっている。〈オルガン〉に関しては都市部からの投稿割合が高いが、これは当時の都市部以外の学校等へのオルガンの普及がまだ十分ではなかったことの表れと考えられる。逆に〈唱歌〉〈ヴァイオリン〉〈箏〉はどの地域からの投稿作品にも比較的高い頻度で登場しており、明治40年代時点ですでに居住地に関係なく親しめる音楽ジャンルとして確立されていたと言える。

大項目では〈都会〉は歌唱、洋楽器、和楽器全てのジャンルの登場頻度が高く、〈地方都市（東日本）〉は他の地域に比べて和楽器の登場頻度が高いが、これは主に〈地方都市（東日本）〉の〈三味線〉の割合の高さに起因している。

## 5. 考察

今回研究対象とした投稿作品全体の音楽ジャンルの大項目については、歌唱:洋楽器:和楽器が3:1:2という結果になった。この結果をもとに、さらに詳細な考察を行っていく。

まず作品ジャンルとの関係を中心に考察する。明治40年から43年の『女子文壇』への投稿作品においては、執筆に際しテーマや字数の制限が少ない〈随筆〉〈日記〉〈小説〉〈お伽噺〉で音楽の描写をされることが多く、作品ジャンルとしては〈随筆〉には様々な音楽ジャンルが、音楽ジャンルとしては〈唱歌〉〈ヴァイオリン〉〈箏〉が様々な作品ジャンルに、比較的偏りなく登場していると言える。

子どもに読まれることを意識して書かれた〈お伽話〉は〈創作歌〉〈唱歌〉の登場頻度が高く、歌唱との結びつきが極めて強いことが明らかになった。理由として、明治後期の学校での唱歌教育の興隆に加え、『女子文壇』の投稿者である女子が、子どもは歌を好む、歌が子どもに良い影響を与えるなど、子どもと歌の関係性にポジティブなイメージを抱いていた可能性が考えられる。

〈小説〉では〈三味線〉〈三味線音楽〉と並び、〈ヴァイオリン〉の登場頻度が高い。少女雑誌『少女の友』に掲載された小説の音楽描写の分析を行った玉川裕子は、ヴァイオリンよりもピアノの方が「形状からしても移動が困難で、いずれかの場所に固定されざるを得ない」（玉川2008:35）ため、ピアノは良妻賢母のイメージと強く結びついている一方、ヴァイオリンについては「少なくとも経済的に夫に依存しながら家庭を守る良妻賢母（およびその予備軍）とは隔たったイメージが付与されている」（玉川2008:34）と述べている。『女子文壇』の〈小説〉においてもヴァイオリンを嗜む女性は、自分を裏切った恋人を「褪せたる恋の勝利者としてヴァニチー<sup>21</sup>を満足させる爲に猛烈な復讐手段を講じ<sup>22</sup>」（5巻3号）たり、「自分は皆が平凡な教師だの結婚だのと夢中になつて間に十分天才を発揮して自分を平凡だと思つて皆の耳目を驚かしてやらう<sup>23</sup>」（6巻6号）と考える描写がなされていた。『女子文壇』の〈小説〉で〈ピアノ〉より〈ヴァイオリン〉が頻繁に登場するのは、楽器の流行時期や入手しやすさの差だけではなく、『女子文壇』の投稿者が創作要素の強い小説において、自己投影や目標として、良妻賢母の枠を越えた女性像を描こうとしていた表れという見方もできる。

〈お題〉は巻号ごとに指定されたテーマによって音楽の登場回数が上下するが、音楽に関係のあるテーマが複数回出されており、〈オルガン〉〈ピアノ〉〈ヴァイオリン〉〈箏〉〈三味線〉といった楽器の登場頻度が高く、洋楽器は憧れや理想、和楽器は身近で親しみのあるものとして扱われる傾向にある。これは〈日記〉〈ノンフィクション〉は〈箏〉に代表される和楽器の登場頻度が高いことも関連し、女子たちが実際に日常の中で触れる機会が多く、かつ「書き残す価値があるもの」と判断したのが和楽器だったと推察した。

次に投稿者の居住地との関係について考察する。各地域からの投稿作品の歌唱:洋楽器:和楽器の登場比率は概ね、投稿作品全体の結果と同じ3:1:2であり、地域ごとの大きな差異は見られなかった。音楽の登場頻度については、〈都会〉からの投稿作品において登場頻度が高く、1作品内に複数の音楽ジャンルが描写されることも多い。また、〈都会〉の作品は〈ピアノ〉の登場頻度も高い。〈三味線音楽〉〈手風琴〉〈三味線〉は西日本より東日本からの投稿作品において、〈オルガン〉は都市部からの投稿作品で高い頻度で登場する。したがって当時は東京、横浜、名古屋が、最も多彩な音楽の選択肢に恵まれていたと考えられる。これらの分析から、明治末

期の日本において、都市部ではオルガンやピアノのような大型の鍵盤洋楽器に身近に触れられる環境が整いつつあり、さらに三味線や琵琶等の和楽器もたしなむ選択肢があったが、都市部以外ではまだ大型鍵盤洋楽器に触れる機会が少なかったことが、投稿作品にも表れていると考えた。一方で、都市部以外の女子たちも唱歌、ヴァイオリン、手風琴、箏については都市部と同程度、労働と切り離すことのできない仕事歌については都市部以上に作中に登場させており、自身を取り巻く環境で享受できる音楽を書き残していることが分かった。

## 6. 結論

本稿では明治40年から43年にかけて発行された『女子文壇』の投稿作品に登場する音楽に関するキーワードに着目し、音楽の種類や傾向を分析することにより、『女子文壇』の読者や投稿者である女学生や女学校を卒業したばかりの女子たちが、どのような音楽に親しんでいたかについて考察した。文章投稿作品10822作に対し、音楽登場作品1100作という数字は、投稿作品10作のうち概ね1作には音楽の描写が含まれていることになり、音楽が文章作品を形成する上で大きな役割を果たしていたことを示している。

分析の結果、彼女たちにとって身近な音楽は唱歌、オルガン、ピアノ、ヴァイオリン、箏、三味線等だが、もっとも触れる機会が多かったのは唱歌をはじめとした歌全般であった。この傾向が顕著なのがお伽噺で、『女子文壇』の投稿者たちの多くが、子どもと歌に何らかの親和性を見いだしていたと考えられる。楽器については、日記のように日常の出来事を書く作品内では箏が、よりフィクションを描く小説ではヴァイオリンや三味線が言及されることが多かった。

また、居住地により作中に登場する音楽にも差異があり、都市部、とくに都会在住の投稿者ほど音楽の選択肢が豊富で和洋を問わず作品内に音楽を多く登場させる傾向があるが、都市部以外の者も唱歌や箏などについては都市部と同等に作品内で言及し、労働を彩る仕事歌も多く作中に登場させていた。学校教育の視点から考えると、明治40年から43年という時期は、唱歌教育については地域差が少ない状態まで普及していたが、西洋音楽についてはまだ地域によって受容の程度に差が生じていることが、投稿作品から読み取れる結果となった。

情報、教育機会の格差が大きい時代に、居住地や社会階級の区別なく投稿が可能な『女子文壇』に、様々な境遇の女子が文章を介した自己表現の一部に、音楽という要素を取り入れていたことは注目に値し、今後は一作品ごとのより詳細な音楽の描写、図画や写真の投稿等についても研究を進めるとともに、同世代の男性作家の作品との比較も行っていきたい。

---

引用文中の旧漢字・変体仮名等は、現代の表記に改め、二桁を超える漢数字についてはアラビア数字で表記した。

『女子文壇』からの引用については引用箇所後にアラビア数字で引用元の巻号を付した（例：第一巻第三号＝1巻3号）。史実の記載にあたっては西暦（和暦）年の併記とした（例：1874年＝1874（明治7）年）。

## 【註】

- 1 結婚による改姓を機に筆名も小寺菊子に変更。自然主義文学の大家であり、『女子文壇』本欄にも度々寄稿している徳田秋声に師事し、自らも自然主義文学に近い作風の作品を多数執筆した。
- 2 本名服部テイ。水野てい子、服部貞子、服部水仙、服部水仙子等の筆名を使用した。徳田秋声同様、自然主義文学の代表的作家である田山花袋に師事した。
- 3 本稿では、執筆作品に対し原稿料を得て生計を立てる職業作家を「プロフェッショナル」、単発の賞金等は除き無償で執筆活動を行う投稿者を「アマチュア」と分類した。
- 4 「少女文壇」の項は15歳以下の読者からの投稿に限られており、後の姉妹誌『少女』の礎となった。
- 5 新作の脚本。投稿数自体が極めて少ないため、今回の研究対象からは除外した。
- 6 本名加藤磯夫。尾崎紅葉に師事し、泉鏡花、徳田秋声、柳川春葉らとともに尾崎門下の四天王と呼ばれた。
- 7 ここで使われる「都会」という言葉は東京を指しており、大阪などの地方都市は「地方」として扱われている。本稿の投稿者の居住地の分類もこの呼称に準じることとした。
- 8 農学者、農業経済学者。帝国大学農科大学教授を経て1911年に東京農業大学初代学長に就任した。

- 9 「女が中心に成つて働く」
- 10 三味線の伴奏を伴う歌の内、俗謡に分類したものとは異なり、人前で演奏することを前提としたものを「三味線音楽」とした。
- 11 服部水仙子「踊り子」、掲載号の短編小説で一等に選ばれた投稿作品。
- 12 現在の東京23区とほぼ重なる旧東京市の範囲が確定したのは1936（昭和11）年だが、研究対象期間である明治40年代から大正にかけて「大東京」という表現を用いる際には、前述の1936年に確定した旧東京市の範囲を指していたため、本稿でもそれに倣った。
- 13 例として、1つの作品に〈オルガン〉と〈ピアノ〉両方が登場した場合、洋楽器登場数としては1となる。
- 14 以降、〈お伽噺〉は上記『少女』に掲載されるようになる。
- 15 翠子「熊と子供」、掲載号のお伽噺で人賞に選ばれた投稿作品。
- 16 稲穂女「姉」、掲載号の文芸遊戯姉妹合せて秀逸に選ばれた投稿作品。課題は「或る母親が令嬢に向ひ「何か一藝を教へてあげるから好みを言つてご覧なさい」と言つた」のに対する答え。
- 17 しげ子「希望」、掲載号の文壇余興に掲載された投稿作品。課題は「好きな音楽」。
- 18 博田しか子「妹」、掲載号の文芸遊戯姉妹合せて五等に選ばれた投稿作品。課題は注15と同じ。
- 19 さだ子「西洋楽」、掲載号の文壇余興で秀逸に選ばれた投稿作品。課題は注16と同じ。
- 20 若井（2005）では3名以上の者が挙げた歌の曲名のみ記載しているため、曲名が記されていないものについては2名以下（0～2）とした。
- 21 前後の文脈より、「vanity（虚栄心）」のカタカナ表記と推測される。
- 22 秋山欣子「復讐」、掲載号の短編小説で一等に選ばれた投稿作品。
- 23 寂靜子「冷い女」、掲載号の短編小説で人賞に選ばれた投稿作品。

## 【史料】

1907-1912 『女子文壇』東京：女子文壇社。

## 【主要参考文献】

- 東島, 佳子  
2023 「子どもと唱歌・童謡の関わりについて——唱歌・童謡の歴史と背景とともに——」『名古屋短期大学研究紀要』61：127-137.
- 本田, 和子  
2012 『女学生の系譜・増補版—彩色される明治（増補版）』東京：青弓社。
- 飯田, 祐子  
1998 「愛読諸嬢の文学的欲望—『女子文壇』という教室—」『日本文学』47(11) 22-35.
- 金子, 幸代  
2007 「『地方』と『都会』——『女子文壇』における投稿の研究—」『近代文学研究』24：75-88.
- 2011 『『女子文壇』執筆者名・記事名・データベース DVD-ROM』東京：不二出版。
- 森, みゆき  
2014 「明治期の一般大衆の西洋音楽受容」『平成音楽大学紀要』14（1・2）39-61.
- 清水, 春菜  
2022 「明治後期から昭和初期におけるミッション・スクールの音楽演奏の機会について——女子学院同窓会を例に——」『お茶の水音楽論集』24（印刷中）.
- 高田, 知子  
1993 「明治期の関西における手風琴の流行」『音楽研究』11：53-78.
- 玉川, 裕子  
2008 「『ピアノを弾く女性』というジェンダー表象——近代日本の場合—」『ジェンダーと表現——女性に対する暴力を無くすためのもうひとつの視点からの試み—」2007年度フェリス女学院大学学内共同研究報告書：23-36.
- 歌川, 光一  
2019 『女子のたしなみと日本近代』東京：頸草書房。
- 若井, 勲夫  
2005 「唱歌と現代文学（下）」『京都産業大学論集人文科学系列』33：184-166.
- 渡邊, 澄子  
2005 「解説」『復刻版女子文壇』別冊：東京：不二出版：1-22.
- 余, 鳳平

清水 明治40年から43年の『女子文壇』投稿作品に見る女子の音楽活動

2020 「『良妻賢母』として期待された『女学生あがり』の運命——『三四郎』の里見美禰子と『虞美人草』の甲野藤尾を中心に——」『日本言語文化研究』2 : 74-82.